

# 神内池（じんないいけ）



## 諸元

貯水量	1,380 千m <sup>3</sup>
満水面積	39.3 ha
受益面積	1,011.5 ha
堤高	15.2 m
堤長	249 m

高松市南部にある神内池は、<sup>しかいけ</sup>四箇池と呼ばれるため池群の一つであり、四箇池のうち、最初に築かれたため池です。もともこの場所は低湿地であり、自然に小さな湖を形成していたといわれています。

神内池の築造に動き出したのは、徳川政権が確立し、長い戦乱の世から世情が安定し始めた時期でした。高松藩は、藩の財政を確立するため、ため池を築造し新田を開発する事業に努めていました。そんな中、寛永3年(1626年)、讃岐国内で95日間にわたり全く雨を見ず、未曾有の大凶作で餓死者が多く発生する事態となりました。<sup>いこま</sup>第4代の藩主高俊は、<sup>たかとし</sup>ため池の築造と新田開発を急ぐため、寛永5年(1628年)に西嶋八兵衛を招きました。西嶋は、寛永12年(1635年)5月に神内池の工事に着手し、同年9月に完成という当時の技術としては驚くべき早さで工事を行い、讃岐の日照りに備えました。

その陰で、今日のダム建設と同様、神内池でも半強制的に我が家を地底に沈めて、わびしく移住された人々が多数おられたそうです。我々は、多くの人々の犠牲があった歴史に目を閉じることなく、更に「水を大切に」を心掛けねばなりません。



神内池



看板